

「園長先生はよくしゃべりますねえ」と言われることが多々あります。そんなときは「ええ、大阪出身ですんで口から先に生まれてきたみたいですよ」と答えています。確かに無口な大阪人もいらっしゃると思いますが、一般的に大阪の人は他の地方の方よりもおしゃべりで、そして会話を楽しむことを大切にしていると思います。7月、私たちの幼稚園の先生が大阪での学会に出席しました。何度も東京などに滞在経験のある先生ですが、大阪は初めての訪問でした。日本のことを良く知っている先生ですが、さすがに今回の大阪は「日本のようで日本ではないような気がした」と印象を話してくれました。街の雰囲気や行きかう人のファッション、そしてなによりも歩く早さが違うように感じたそうです。そして「綺麗に着飾った可愛い年頃の女の子が、大きな口を開けて大阪弁を大声で話していた」姿には本当に驚いたそうです。確かに小声でひそひそ話をする大阪人はなかなか見当たりません。

大阪がどうして極端におしゃべりの街になったのかは、商業の街であったからだと言われています。商売は相手の気持ちを会話の中で察して、そして交渉が始まるのです。ですから大阪人にとって言葉とは「意味のある表現」と言うよりも、「相手の知らない何かを相手に伝えること」と理解しているのだとも思います。まあ、相手にしてもらえないと寂しいというラテン人的気質もあるかも知れませんが、そんな気質ではぐくまれた大阪弁は毒のある鋭角的な表現よりも、相手を気遣うやさしい丸い表現が多く見受けられます。例えばとても有名な「考えときま」。これは交渉の終了、つまりこの話はこれでおしまいと言う意味なのですが、そのまま「いらない」と言うと、言葉に角が立ってしまいますので、婉曲にお断りしている言葉なのです。他にもしやれ言葉などの言葉遊びを上手に使って、会話を続けていきます。今回のテーマからははずれるのですが、物の値段を値切ることも大阪での生活では重要なことなのです。値札が付いてあっても必ず「これ何ぼ？」から交渉が始まります。お店の方でも初めから値切られるのがわかっているので値札も高い目には書いているようです。そして何度かのやり取りの後、交渉が成立するのですが、大阪のおばちゃんたちはこの交渉中に必ずと言ってよいほど関係ない会話を挟みます。「にいちゃん、男前やなあ」「もう結婚してんの？」などなど。そして必ず体を触ります。全然値切り交渉と関係ないのですがね。そして値段が決まると必ず「何付けてくれんの？」とおまけを催促します。値切っておまけもらって初めて満足するのだそうです。と言う私も大阪ではそのような交渉をしょっちゅうしていました。そして何と驚いたことに、トルコやチュニジアでの買物にその体験が役立ったのでした。彼らは売り手の方から「これはいくらだ？」と買い手に聞いてきます。それから値段交渉が始まるのです。その地の物価レベルを予め頭に入れておいて、クレジットカードとキャッシュを上手に使って値切っていきます。そして最後に買うのですが、それはその売り手がまだ儲かっているということなのです。大げさに「損した、損した」と言っているにもかかわらず儲かるということなのです。結構成立まで時間がかかりますが、それだけに相手を引き止める会話が必要となります。

さて本題に戻り。大阪は商売の交渉の必要性によって言葉が発達してきました。日本語もその用途に応じて発達してきました。私たちが日常使っている日本語、その起源は未だに確定していませんが、おそらくアジア大陸の言葉と東南アジア、オセアニアの言葉とが混ざり合ってきたのではと言われています。そして平安時代と今日とでは発音の異なる部分があるそうです。例に出しますと五十音の「わ行」の第2文字に使われていた「ゐ」という文字です。これは今では「い」と同じ発音となっていますが、この文字ができた平安時代には「wi」と発音されていて、明らかに「i」とは異なる音だったそうです。同じように「わ行」の「ゑ」は「we」、「を」は「wo」と発音されていたのが、近世になって「e」「o」と同じ音になったそうです。また平安時代には「f」の発音があったり、「鼻」の発音を「pana」としていたと言われています。

ヨーロッパで言葉に興味のある人たちの間では、日本語は奈良時代にできた言語だといわれています。確かにそれ以前も日本語があったと思いますが、文字として残っているのは奈良時代からですので、「会話と文献があって1つの言語とする」考え方では、日本語の成立は奈良時代だといわれても仕方のないことだと思います。しかしその日本語は飛躍的に進歩し、1001年には世界で初と言われる小説「源氏物語」が初めて文献

に現れます。この物語が何故画期的なのかと言うと「世界で小説と呼ばれる物語は17世紀頃から現れ始めているのに、その遙か前に既に存在していたこと」「作者が女性であること」「物語の中では漢語がほとんど使われていないこと」などが挙げられています。その当時漢語を極力使わずに長文を書くなどは、現代の論文を外来語のカタカナ表記なしで書くほどのことだと思います。その作品のお陰で作者の紫式部は2001年にアメリカのマスメディアが選んだ「世界の文明、文化に影響を及ぼした百人」の中に葛飾北斎と共に選ばれています。太古から伝わる大和言葉を大切にした文学であることも重要なポイントかと思っています。その後、日本語は休むことなく進化していきました。江戸時代には今では誰でも使うような言葉も「若者の悪い言葉」とされていたことがあります。いつの時代でも「今時の若い者は・・・」という老人の言葉があったのです。そしてその後明治新政府ができたとき、政府内での会話が非常に困難だったそうです。想像しても薩摩と長州、土佐の人たちがすらすらと会話できるとは思えませんよね。そこでどのようにこの問題を解決したかと言うと、全国を旅回りしていた芝居小屋のせりふを使うようにしたそうです。役者のせりふは全国何処に言っても同じ言葉や言い回しを使うので、何処の出身者でも理解できたそうです。明治維新でそれまでの鎖国から開国へとなり、たくさんの文化が日本に、まるで土石流のような勢いではいてきました。その中には間違っ理解された外国語もあります。例えばめっきした薄い金属板を「ブリキ」といいます。これはイギリスから届いたレンガを包んでいたものなのです。そこでその金属板を何かと訊ねた日本人に、答えた外国人はその中身を訊ねられていると思い「Block」と答えたのが始まりだそうです。このように間違っ理解された外国語がまだまだあると思います。

今、不思議に思っているのが外国の地名の漢字表記は誰が考えたのかなと言うことです。色々調べてみたのですが、早いものでは17世紀にできているようです。しかし日本独自の漢字表記を定めたのかがわからないのです。またこの章を綴りながら色々な文献を調べたのですが、当地ブラッセルの漢字表記がわかりません。どちら様かご存知の方がいらっしゃれば、是非とも教えていただきたいと思っています。

なんだか取りとめもない駄文になってしまいましたが、最後までお付き合いいただいたお礼に、クイズを出します。お時間のある方は挑戦してみてください。

ヨーロッパの国名の漢字表記

1) 私たちが暮している国は白耳義ですが、では次の国は何処でしょうか。

A 波蘭 B 愛蘭 C 丁抹 D 葡萄牙 E 芬蘭

2) 次の地名は何処でしょうか。

A 寿府 B 鹿持坦 C 剣橋 D 瓦得路 E 牛津

《つづく》

参考文献 大野晋著 「日本語の起源」「日本語の文法」

渡部昇一著 「世界に誇れる日本人」

大辞泉

ウェブサイト 外国地名の漢字表記